

七夕・納涼祭り

【七夕飾り】



7月1日から7日まで、正面玄関の一角に七夕の笹竹を用意しました。

患者さんをはじめ、笹竹の前を通る方々に思い思いの願い事を含めた短冊を飾っていただきました。用意した短冊が足りなくなり、何度も補充したところ、たくさんの願い事が笹に飾られました。また、より高いところに飾ろうと、背伸びしながら枝をたぐり寄せている子供の姿が印象的でした。

皆さんの願い事が叶いますように…。

【納涼祭り】

7月30日、病院正面玄関横で「納涼祭り」を開催しました。

入院中の患者さんに、ご家族やお友だちと一緒に「宵宮」のような

雰囲気を感じていただきたいと思います。今年もヨーヨーつり、スーパーボール・光りものすくい、的あて、輪投げ、千本つりなどを用意しました。

蒸し暑い時間帯にもかかわらず、昨年を上回る多くの患者さんたちが集まってくれたので、とても賑やかに開催することができました。ヨーヨーつりやスーパーボールすくいでは、大人も童心に返って大いに楽しんでいました。両手にいっぱい景品を持って喜んでくれる患者さんたちの姿に、スタッフも元気をもらいました。

運営に協賛してくださった団体や企業、また、準備・運営・後片付けに協力してくださったスタッフの皆さんには、この場を借りてお礼申し上げます。(医事課)



弘前ねぶたまつり

津軽地方の伝統行事「弘前ねぶたまつり」が8月1日から7日間行われました。弘前大学のねぶたまつりも大学と地域住民との交流を図ることを目的として、1日、3日、5日の3日間参加し、昭和39年に初参加以来、連続52年の出陣を果たしました。

3日には、附属病院外来診療棟正面駐車場において、小児科に入院中の子供達や保護者、医師、看護師、事務職員等による「小型ねぶた」が運行されました。本学は

やしサークル「弘前大学囃子組」等による太鼓と笛の音にあわせて、子供達は「ヤーヤドー」と元気の掛け声を響かせ、津軽の短い夏の夜のひとときを楽しんでいました。

また、病院内では、中央待合ホー



ルにミニねぶたが飾られ、来院された方々にも好評でした。(総務課)

弘前市総合防災訓練に参加



8月19日、弘前市運動公園にて弘前市総合防災訓練が行われました。訓練は弘前市に最大震度6弱の地震が発生したという例年通りの想定に、今回は岩木山の火山被害が追加されました。

本院からは藤哲病院長と災害派遣医療チーム(DMAT)が2チーム参加しました。1チームは現場医療班の統括業務を担当し、高度救命救急センターの伊藤勝博、山内良太医師、坪田明憲看護師、平田成直事務職員にて活動し、弘前地区消防事務組合と弘前市立病院

DMAT・弘前市医師会チームと協力して、倒壊施設の100名の傷病者に対応しました。もう1チームは青森県防災ヘリ「しらかみ」による重傷者搬送を担当し、山村仁教授、神庭文医師、赤平良子看護師、木村洋事務職員にて活動し、弘前大学医学部附属病院のヘリポートへ搬送を行いました。

アメリカ医師会では、全ての医療従事者は第二専門分野として、災害医療を身に付けるべきだと主張していますが、日本においても東日本大震災を契機に、災害医療

は重要視されていて、災害医療は全医療関係者が具有すべき知識及び技能であると考えられています。災害時には、災害・救急医療を専門としない医療関係者の協力が不可欠となります。昨年度から当院の防災訓練も多傷病者受入訓練を行うようになり、約230名の職員等が参加していますが、全職員数から見ると一部に過ぎません。また被災地の災害訓練に参加すると、災害に対する認識や技能が明らかに異なっているのを実感します。昨年度に本県の災害基幹・拠点病院の8施設全てにDMATチームが整備され、本年度から災害医療コーディネーター制度を導入し、システムは大きく改良されました。当地区が被災した場合には、高度救命救急センターのスタッフのみでは対応は不可能であるため、弘前大学の職員が一丸となり対応できる施設となれるよう望んでいます。(高度救命救急センター 伊藤勝博)

病院長推薦の一幅の絵「りんごの花の咲く頃に2013」

医学部附属病院には、患者さんや教職員の目を楽しませるために様々な絵画が飾られています。今回は、外来診療棟1階エスカレーター脇の壁に飾られてある絵を紹介いたします。



長い冬が終わり、桜に続いて白く可憐なリンゴの花が咲きます。心が浮き立ち、歌いだしたくなるような喜びが描かれています。

佐竹伊助

(昭和27年、東京美術学校(現芸大)卒)

日本輸血・細胞治療学会 村上記念学会認定・自己血輸血看護師奨励賞を受賞

5月28日から東京で行われた日本輸血・細胞治療学会におきまして、村上記念学会認定・自己血輸血看護師奨励賞を受賞致しましたのでご報告致します。

学会認定・自己血輸血看護師は、2008年に日本自己血輸血学会と日本輸血・細胞治療学会が、適正で安全な自己血輸血を推進する看護師の育成と自己血輸血のみならず臨床の輸血において指導的な役割を果たすことを目的として、学会認定・自己血輸血看護師制度協議会が設立されました。2009年に第1回認定試験が開始され、現在までに14回の試験が行われています。村上記念奨励

賞は各認定試験の成績優秀者に授与されており、自己血輸血分野においては青森県で初の受賞となりました。

試験に向けて勉強を始めると、本当に輸血の知識がないことを再認識しました。学生時代は輸血についての授業も記憶になく、入職後は先輩から教わった知識もろ覚えのまま、適正な使用方法など理解せずに輸血を行っていました。そんな中で輸血部の玉井先生に勉強会を開催して頂き、理解不足なものは輸血部に確認しながら、なんとか知識を深めていきました。輸血部の方々には、何度も質問しましたが、いつも丁寧にお

答えいただき、本当に感謝しています。また、こうして受賞でき、弘前大学の名前を少しでも広めることができましたことを嬉しく思います。

これからも学会認定・自己血輸血看護師また臨床輸血看護師として自らの知識の向上と院内の安全な輸血の施行に向けて少しでも助力できればと思います。

(看護部(ICU) 村岡祐介)



この人 No.7

本院の多方面で働くスタッフを紹介いたします。



院内保安員 建部 光徳 さん

昨今の医療機関では、医療従事者等に対する患者さんやその家族による暴言・暴力が全国的に多数発生し、問題となっています。本院においても、いわゆるモンスターペイシェント対応に苦慮するところであり、診察室等で大声をあげる、診療に納得いかないとして診察室から出ない、病院への過度の要求などが発生しています。これにより、他の患者さんへの影響をはじめ、長時間にわたる対応による業務の停滞など、病院の診療等に支障を来しているほか、対応にあたる職員の精神的苦痛も大きくなっています。

これらの状況を鑑み、平成27年4月1日より、患者さんに適正な療養環境を提供するため、また職員の安全・安心等の観点から、トラブル対応のノウハウや法律の知識を持った警察官OBを採用し、保安対策要員として院内に配置しました。配置したことで、トラブルへの対応や、警察等関係機関との連携体制の強化が図られるとともに、院内周知による暴言・暴力等の抑止効果により、安心して診療等に当たる事が期待できます。

保安対策員は、医療安全推進室に配置し、適宜院内を巡回しているほか、毎朝、玄関総合案内にて患者さんの対応をしております。

《建部氏から一言》

4月に院内保安員の辞令を受け勤務してから5ヶ月あまり、院内で発生する医療従事者等に対する暴言・暴力・迷惑行為等のトラブルがあった際は、医事課スタッフと協力し対応しています。

これからも皆さんの期待に応えられるように頑張りますので、宜しくお願いします。(医事課課長補佐 五十嵐義之)

【編集後記】

南塘だより第79号をお届けいたします。原稿をお寄せいただきました皆様には、こころより感謝申し上げます。この号が発刊される頃には、津軽の短い夏も駆け足で通り過ぎ、秋も深まりつつある頃ですが、皆様は夏をどのように過ごされましたでしょうか？今年の夏の甲子園では、三沢商は残念でしたが仙台育英が準優勝しました。なかなか優勝旗を東北の地にもたらしことは難しいようですが、2013年の聖愛高校の甲子園での活躍も思い出されますし、以前よりは力の差は縮まっているようです。

秋はスポーツのベストシーズンです。アップルマラソンなどありますが、日々の仕事のストレス発散などのためにも、たまには汗を流してみませんか。(広報委員会 A.M)